

令和4年（2022年）7月18日に 長崎県 壱岐・対馬（九州北部地方）で 線状降水帯が発生した事例

【概要】

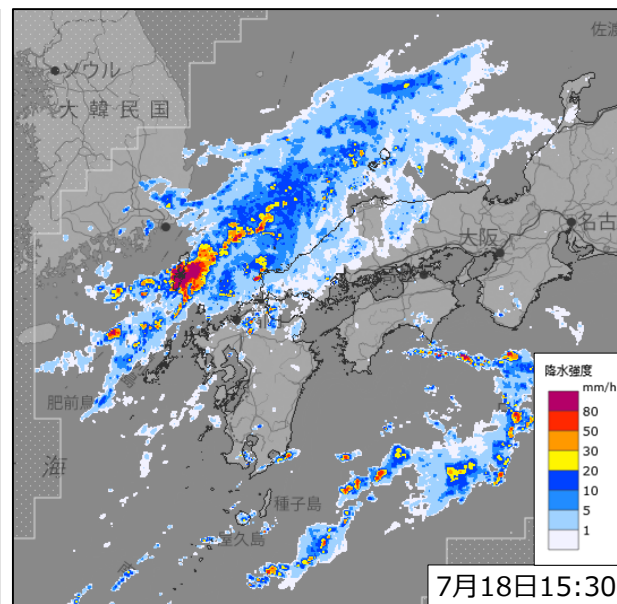
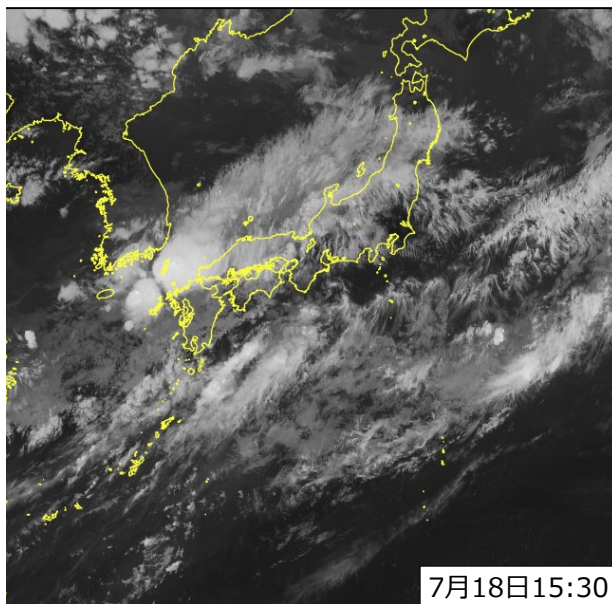
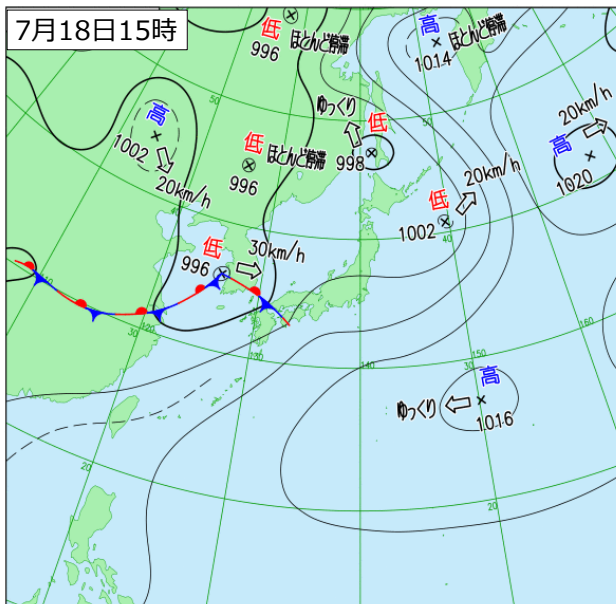
- ・ 長崎県 壱岐・対馬で、7月18日夕方に線状降水帯が発生した。
- ・ 九州北部地方に対して、半日程度前からの呼びかけは実施していなかった。

令和4年7月 気象庁大気海洋部

気象の概況

■ 概要

- 黄海から日本海に進む低気圧や前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込んだ影響で、西日本では7月18日から20日にかけて九州を中心に大雨となった。
- 7月18日の夕方には、長崎県壱岐・対馬で線状降水帯が発生し、猛烈な雨が降った。



7月18日に長崎県壱岐・対馬で線状降水帯が発生した際の気象状況 左：天気図 中央：気象衛星画像 右：気象レーダー

線状降水帯の予測及び発生状況

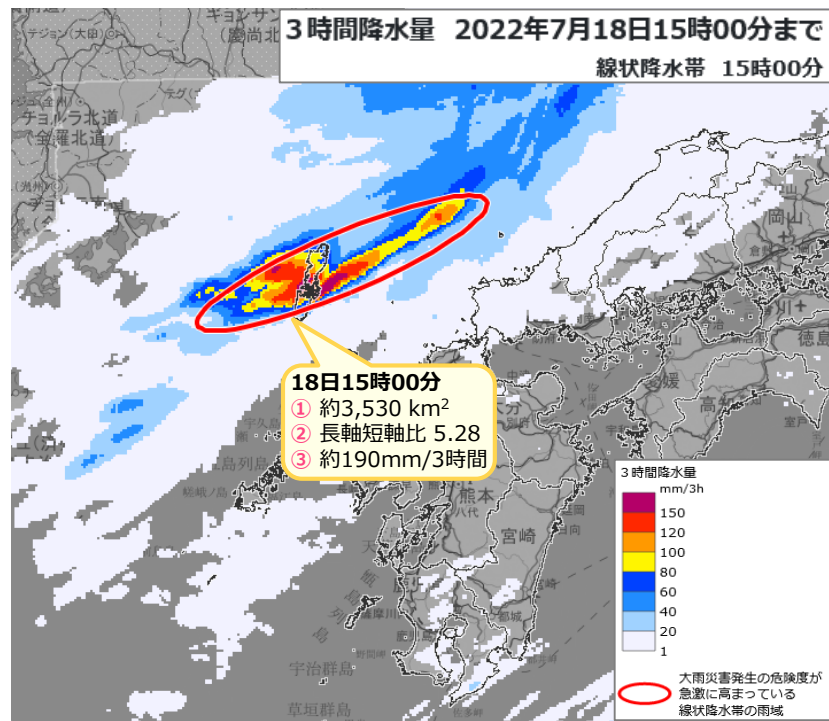
- 半日程度前の段階では、線状降水帯の予測情報を発表する判断に至らなかった。

※九州北部地方の3時間雨量予想の最大は45ミリ（熊本県内）であった。

- 線状降水帯の発生した地方予報区

九州北部地方（長崎県壱岐・対馬） 顕著な大雨に関する気象情報：7月18日15時09分発表

○ 線状降水帯が発生したときの3時間降水量



○ 線状降水帯の予測に対する発生状況

● 九州北部地方

半日程度前の段階では、これまでの経緯を踏まえて予想した気象状況から、災害が発生してもおかしくない大雨となる判断は難しかったため、線状降水帯の予測情報を発表しなかった。

18日夕方に線状降水帯が発生して3時間近く継続、多い所で3時間降水量が約250ミリ※に達する雨を観測した。

※ 線状降水帯が発生している期間内の、気象レーダー等による解析雨量

顕著な大雨に関する気象情報の発表基準

- ① 解析雨量（5kmメッシュ）において前3時間積算降水量が100mm以上の分布域の面積が500km²以上
- ② ①の形状が線状（長軸・短軸比2.5以上）
- ③ ①の領域内の前3時間積算降水量最大値が150mm以上
- ④ ①の領域内の土砂キキクル（大雨警報（土砂災害）の危険度分布）において土砂災害警戒情報の基準を実況で超過（かつ大雨特別警報の土壌雨量 指数基準値への到達割合8割以上）又は洪水キキクル（洪水警報の危険度分布）において 警報基準を大きく超過した基準を実況で超過

本資料について

- 本資料は、[線状降水帯による大雨の半日程度前からの呼びかけ](#)を実施した事例、および線状降水帯が発生※した事例の速報的な検証資料です。
※ ここで、「線状降水帯が発生した」とは、前ページの「顕著な大雨に関する気象情報の発表基準」を満たした場合をいいます。
- 本検証資料は「大雨事例等における防災気象情報の精度検証と発表基準の改善」のページからアクセスできます。
<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/jirei/index.html>
- 関連する情報は、「線状降水帯に関する各種情報」のページをご覧ください。
https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/bosai/kishojoho_senjokousuitai.html
- 線状降水帯による大雨の半日程度前からの呼びかけを、地方予報区単位で実施していることから、検証も地方予報区単位で実施し、同じ地方予報区でも時間がある程度あいた場合等は異なる事例として取り扱っています。ただし、ここに掲載する検証資料は、地方予報区をまたいで線状降水帯が発生した場合等に1つにまとめていることがあります。

現在の技術では、線状降水帯による大雨の正確な予測は難しく、呼びかけを実施しても必ずしも線状降水帯が発生するわけではありませんが、線状降水帯が発生しなくても大雨となる可能性は高いため、この情報が発表されたときには心構えを一段高めてください。

また、線状降水帯による大雨の呼びかけがなくても、線状降水帯が発生したり、災害をもたらすような大雨となったりすることがあるため、自治体が発令する避難情報や、大雨警報やキキクル等の段階的に発表される防災気象情報とあわせてご活用ください。